

## 長有紀枝著「入門 人間の安全保障 -- 恐怖・欠乏からの自由を求めて」(新刊紹介)

著者	岡部 正義
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	209
ページ	46-46
発行年	2013-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003781">http://hdl.handle.net/2344/00003781</a>

長 有紀枝 著  
『入門 人間の安全保障』  
—— 恐怖・欠乏からの自由を求めて ——

中公新書、二〇一二年二月



一九九四年の国連開発計画（UNDP）『人間開発報告書』で国際社会に提起された人間の安全保障。その特徴は「恐怖からの自由」と「欠乏からの自由」を二大規範とする点にある。

背景にはアマルティア・センの潜在能力アプローチ、さらに述べればマブープ・ウル・ハクの人間開発論がある。同時に、冷戦後の国際政治学における非伝統的安全保障や平和への配当、破綻国家などの議論などにみられるように、国家だけでなく個人の安全も重視すべきという規範が密接に関係している。いまひとつの特徴として、そのアプローチや対象の多様性がある。国際関係論や開発経済学など社会科学のみならず、人類学や歴史学などの人文科学、地域研究、さらには感染症・HIV・自然災害などの観点から自然科学も重要である。本誌も二〇〇六年一月号で特集を組んでいるが、紛争・平和構築（栗栖論文）と開発経済・貧困（澤田論文・中西論文）という基本問題から、「コミュニティ（中西論文）、感染症・健康（三浦論文）、ジェンダー（村山論文）、農業・食糧（山田論文・野上論文）」に

までトピックはわたっている（本誌No.一二四）。「貧困削減から平和構築まで、ODAからNGOまで、途上国における飢餓から先進国における食の安全まで、

大量破壊兵器から鳥インフルエンザまで」（参考文献①iiページ）語ることができるぐらい射程の広い概念である（それだけに漠然としたよく分からない概念と思われることも少なくない）。そんな豊富な分野の入門を著した長

氏は、大学院レベルの人間の安全保障研究・教育を行う東京大学「人間の安全保障」プログラムの博士学位第一号取得者である。すでに出版された『スプレニツァーあるジェノサイドをめぐる考察』（東信堂、二〇〇九年）からもわかるように、「恐怖」の問題特にジェノサイドの専門家である。国際政治に通暁した知識と、これまで氏が国内外であたってきた難民支援等の実務経験に裏付けられた豊富な内容が分かりやすく一般向けに解説された入門書である。

●本書の構成

まず第一、二章では、国際政治学・国際法の観点から、国際社会に関する

基礎知識が整理されている。ウェストフリアア体制以後、西欧世界のモデル（国民国家・主権国家体制）が地球大に拡大してきた近代史過程を紐解きつつ、「安全保障」を国家が担ってきた前提条件としての国際社会の仕組み、また紛争違法化の法的論点が解説されている。

これを踏まえ、第三章では概念の形成・発展過程・思想的系譜を振り返り、第四章はその担い手として、国家だけでなく国際社会やNGO、赤十字組織、地域社会など多様なアクターが存在することを説明する。第五章では、恐怖や欠乏の具体事例を取り上げる。子ども兵や女性器切除など思わず目を背けたくなる内容も登場するが、恐怖と欠乏の実態を理解するうえで欠かせない。第七章では、これまで世界で行われてきた取り組みが紹介され、第八章では国家が破綻・失敗しているケースでは他国や国際社会が人道的に文民を保護する必要性を説く「保護する責任」（R2P）が解説される。

ここまでは、途上国に焦点が当てられてきたが、最後の第八章は東日本大震災に一章を割いている。先進国、しかも経済大国と自他ともに認めてきた日本において、当たり前だと思われていた生存・暮らしの安全・安心が、11を境に一瞬にして奪い去られた。被災地では女性や老人、障害者などが特に脆弱となる点や、原発問題による不

●「今こそ人間の安全保障」再び

一九九四年から二〇一〇年近くが経とうとしている。この間に、貧困削減や平

和構築が世界的に目指され、「今こそ人間の安全保障を」（Human Security 2011）と題する報告書が出されるなど、個人の安全・安心は国際社会が追究する価値のひとつとなった。一方、東日本大震災をきっかけに、先進国たる日本にあっても個人の生存・安心が容易に奪われることが痛感された。恐怖や欠乏は決して対岸の火事ではない。先進国でも人間の安全保障は真剣に問われなければならない。今日、日本人が人間の安全保障の入門書を取る必要性は、再び高まったと言える。

一方で、人間の安全保障という言葉は根本的に人々のより良い生き方を追求しているという見方もある（二五一ページ）。人間の安全保障の貢献のひとつは、それまで個別にとらえられてきた多様な脅威を相互に関連させ、その関係性を顕在化、意識化させてくれる点にある（二二九ページ）。さらに本書で主張される「異議申し立て」の論理という性格は、ある安全を目指そうとする行動や政策が、別の安全を奪いかねないか点検し、そうであれば「NO」というための礎となる。ひとりの著者が多くの課題をわかりやすく取り上げた本書は、途上国はもちろん先進国においても、「人間の安全」とは何かを思考するための契機として、多くの人びとに読まれたい一冊である。

（おかげ、まさよし／アジア経済研究所 研究支援部）

《参考文献》

①高橋哲哉・山影進編（二〇〇八）『人間の安全保障』東大出版会。